



季刊皿山の歴史

「手塚国一之碑」

～有田焼のライバル・ノリタケ（森村組）の柱石となった男～



手塚国一さん
(手塚一郎さん提供)

この季刊皿山が皆様のもとへ届くころには、長崎歴史文化博物館で開催されていた「ノリタケデザイン100年の歴史」展は終了していることと思います。ただ、この企画展は全国巡回展でもありますので、見逃した方は次の開催地・静岡県佐野美術館などでぜひご覧ください。

ノリタケ、オールドノリタケと呼ばれる陶磁器は日本の洋食器産業の礎を築いた、ノリタケカンパニーリミテドの製品です。明治から昭和にかけて、当時流行の美術様式を取り入れた優雅で華やかな陶磁器やデザイン画など、ノリタケカンパニーリミテド所蔵のおよそ200件が公開され、そのデザインの変遷と魅力の全貌が明らかになりました。当時の技法や表現力の素晴らしさが伝わり、多種多様な模様や手の込んだデザインには、人々を魅了した流行や生活様式が反映されています。

100年あまりにわたって世界中に愛されてきたノリタケデザインの変遷が総括して展示されるのはこの巡回展が初めてで、さらに、ノリタケが日本洋食器産業の歴史に果たした役割の大きさを実感できる展示となっていました。

このノリタケは明治9年（1876）、骨董品や雑貨で海外貿易を志した森村市左衛門が起こした森村組にその端を発しています。その後、生地を瀬戸で、絵付けは東京、名古屋、京都などの絵付け工場で行うようになりました。同年3月には市左衛門の弟豊が渡米しました。ちょうどその年の5月から11月にかけて、アメリカ・フィラデルフィアでは独立100年を記念して万国博覧会が開催され、有田からも深海墨之助や手塚亀之助、深川卯三郎らが渡米しました。ニューヨークに支店を設けた森村組とは異なり、有田の窯元、商社は元佐賀藩士であった松尾儀助が社長をつとめた起立

工商会社を經由して貿易を開始しました。当初、香蘭社や精磁会社などは江戸時代の古伊万里の優品にも負けない製品を数多く輸出したのですが、明治の中ごろには次第に有田焼の貿易は下火となっていきました。

そのような中、精磁会社の社長であった大樽の手塚亀之助の長男国一は明治19年に渡米。現地の商業学校に入学し、卒業後はピッツバーグの陶器店フレンチ商会に見習いとして入社しました。その後、独立して米国各地で商売の経験を積み、明治34年1月に森村組のニューヨーク支店に入社しました。以来、仕事に邁進し、その発展に大きく寄与しました。しかし、残念なことに大正8年11月11日、54歳の若さで亡くなりました。森村組ニューヨーク支店の責任者だった村井保固は、大樽・三空庵の墓地内にある「手塚国一之碑」に哀悼文を奉げています。そこには入社以来奮闘努力し、発展を助けて太平洋を航海すること実に27回、「遂に森村組の柱石となる」と称えています。さらに手塚国一その人を「武士の心は氷の如し、凝りて坐すれば岩よりかたし、とけて流るればちりもとめし



大樽・三空庵墓地内にある「手塚国一之碑」

とは、よく氏の性をあらわせり」と評した一文もあります。

ちなみに、手塚国一は米国人ドラ・メミと結婚し、おそらく西洋人と結婚した最初の有田人だと思われます。村井保固もまた、米国人のキャロラインと結婚しており、同じような境遇もあって二人の交友は深かったと思われます。(尾崎葉子)



森村市左衛門、または手塚国一とその弟栄四郎や森村組については館報 No.36、46 を参照下さい。なお、館報の1号からすべて、有田町役場のホームページに「季刊皿山」というコンテンツで掲載していますのでそちらもご覧ください。

皿山

季刊

No.78

夏
2008

有田町歴史民俗資料館・館報

草創期の有田工業学校で校長を勤めた寺内信一さん（山口県出身）は、東京美術学校でイタリア人ラグーザの指導を受け、優れた彫刻家でもありました。卒業後、常滑や瀬戸、有田や清国、砥部と各地に於いて後進の育成に力を注ぎました。

孫である有田在住の寺内謙一さんからレポートをいただきましたので、紹介します。

日韓やきもの交流記 ～高麗青磁と濱田義徳伝

寺内 謙一

翡色の美しい古代の高麗青磁は、11世紀時代、高麗王朝盛期のころに造られたものと推定されている。惜しくも、王朝の衰退と共に消滅し、李朝518年の末期ごろには古墳から出土する高麗青磁に注目が集まっていた。

1910年（明治43年）、日韓併合条約が結ばれ、初代朝鮮総督に寺内正毅が就任したころ、朝鮮で事業を興し、高麗青磁の復興に情熱を燃やす実業家に、富田儀作（1858～1930、兵庫県出身）がいた。

富田は寺内総督に「高麗青磁の復興に窯業の先端技術を導入し、朝鮮の産業育成のため、事業生命を賭けて取り組みたい」と進言し、技師の派遣を願い出た。

寺内総督は富田の熱意に感動し、縁戚の有田工業学校校長寺内信一に技師の派遣を要請し、有田工業学校の卒業生であった濱田義徳が適任者に推薦され赴任することになった。

濱田は熊本県八代で濱田窯を築き、青磁を手がける濱田六郎の長男で、八代中学を中退して父の窯を手伝っていた。濱田窯は朝鮮の陶工・尊偕を祖としている。1900年、パリ万国博に出品し、上位に入賞を果たした濱田窯の状況を視察に訪れた寺内信一は、義徳の非凡の才能を惜しみ、有田で学ぶことを勧め、義徳は有田工業学校第一回卒業生にその名を連ね、同級生には日本窯業界の指導者となる江副孫右衛門らが出た。

卒業後は、窯業技師として山口県や唐津の窯へ指導に赴いた。その後1年間、陸軍の兵役を終え、中園鶴代と結婚後間もなく清国北京の芸徒学堂に「教習」として派遣され、1年の任期を終えて八代に帰っていた。

高麗青磁復興の計画を聞き、義徳は天命の如きものを感じたと思われる。富田の待つ朝鮮・鎮南浦の工場に妻と幼子連れて訪れたのは、1911年（明治44年）8月であった。鎮南浦は北朝鮮の南西部黄海に面した港町である。富田儀作の高麗青磁復興に賭ける情熱と、並々ならぬ決意を聞き、身命を賭しても必ず成功させましようと言われている。

高麗青磁は朝鮮で産出する原料と共に、熟練した製陶技術が求められ、当時は古墳から盗掘されたものが出回るという状況だった。濱田は寝食を忘れ、研究に明け暮れ、幾度も失敗を繰り返し、苦闘の末に、漸く見通しが立つまでには2年あまりの歳月が流れていた。

そして、神仏に祈る思いで開けた窯から見事な青磁が遂に顔を覗かせたのである。富田は濱田の努力に感謝し、総督府に届けられた作品は貴賓室に飾られた。

渡鮮を待ち望んだ弟の美勝が有田工業学校を卒業して鎮南浦を訪れたのは、大正4年6月のことであった。富田が経営した三和高麗焼製作所の業績は、その後、ますます向上し、古代のものを越える見事な作品が造られるようになっていた。

寺内総督は濱田兄弟を総督府に招き、功績を称えるとともに、義徳に麗山、美勝に麗峰の号を贈っている。富田との約束も果たして、至福の時が流れていた。

しかし、大正9年1月、当時流行していたスペイン風邪に侵された義徳は、37歳の若さで忽然とこの世を去った。自らの身命を高麗青磁の復興に賭け、見事に蘇らせながらも惜しまれる生涯だった。彼の偉業は日韓陶業史に特筆されるものがある。

義徳亡き後、弟の美勝は後に人間文化財（韓国のいわゆる人間国宝）となる柳海剛に高麗青磁の技法を3年にわたり伝えたという。

1881年、白川小学校校長の江越禮太は、有田焼の将来を担う青年の育成を目指し、私財を投じて日本最初の実業教育機関・勉脩学舎を創設した。町民の有志らと計り、在京の副嶋種臣、大隈重信、佐野常民の寄付を仰ぎ、有栖川宮熾仁親王より勉脩学舎の大額をいただき、徒弟の教育に着手。やがて、納富介次郎の有田工業学校開校の胚胎となった経緯は郷土史に明らかである。有田工業高校の応接室に勉脩学舎の額は現在も掲げられている。日本の窯業界に幾多の人材を送り



明治32年（1899）熊本・八代「濱田屋」で修業中の濱田義徳（16歳）

出し、優れた作品の実績が認められ、有栖川宮をはじめ、各宮家、大隈重信のほか、政府各省の大臣が視察に訪れたことは、有田の実業教育が如何に期待され、関心を持たれたか想像するに余りある。

志を抱き、各地で活躍した先人の偉業が偲ばれる。

新指定 有田町の文化財

平成18年に新しい有田町が発効して早や2年が経過しましたが、このほど、平成20年4月23日付けで、新有田町の重要文化財として3件を指定、認定しました。

これまでも有田町内には国や県、あるいは旧町時代に指定した文化財がありますが、新しい町になってから初めての指定、認定となります。

(有田町重要無形民俗文化財)

①南川良の七福神(南川原七福神伝承会 会長 館林延幸)

有田町南山地区で毎年1月6日の夕方から、地区の子供たちによって行われている年中行事です。エイショと呼ばれる家に子供たちが集まり、代々柿右衛門窯の絵付け職人さんによって、子供たちの顔に墨で七福神や宰領と呼ばれる鬼豆振りを描きます。

夕闇が迫るころ、鬼豆振りを先頭に、七福神、ぞうり揃え、餅持ちの役目をする子供たちが続きます。「七福神の入りー」という掛け声のもと、南山地区の家々へ上がり、座敷でそれぞれが口上をのべ、最後に豆を振って今年一年の家内安全と五穀豊穰を祈ります。

この行事の始まりや由来などについて、詳しいことはわかりませんが、旧曲川村時代に撮影された昭和28年ごろの16ミリフィルムが残っています。それを見ると、現在とほとんど変わらない状況で七福神の行事が行われていることがわかります。県内では東部地区で大人による七福神の祭りが行われていますが、最近ではめっきりその数は少なくなりました。

そのような意味からも、七日正月行事として子供たちによって行われる「南川良の七福神」は貴重な民俗行事の一つとして大切に伝えていきたい有田の文化財です。



七福神(平成2年ごろ)

②下本の逃げ餅(下本村にげもち保存会 代表 福島日人士)

有田町下本地区の逃げ餅は、毎年11月22日の夕

刻から公民館の前で行われます。もともとは岩屋権現(曲川神社)の祭礼として行われていたものです。

長さ1.5mの檜の丸太棒で臼の中のもち米を2回にわたって搗きます。最初は搗いた餅を泥まみれにし、二度目は蒸かしたてのもち米を臼に投げ入れた瞬間に、搗き手は杵を放り出してそのもち米を掴んで逃げます。これが「逃げ餅」と呼ばれる所以です。

無病息災、五穀豊穰を祈る祭りですが、泥まみれにしたり、逃げ出したりと他ではあまり見られない形態を持つことから「奇祭」と呼ばれます。その由来や起源など詳しいことはわかりませんが、下本地区の人々によって長年にわたり伝えられてきた祭りとして貴重なもので、今回の指定となりました。



子どもたちによる逃げ餅(平成19年)

(有田町選定技術保存)

①有田焼上絵具製造(辻人之(昇楽)・辻公也)

赤絵町の辻絵具店では、辻人之(昇楽)氏、辻公也氏が、有田焼を伝統的な和絵具で上絵付けをする業者へ融和剤である辻唐石や赤、緑、黄色などの上絵具を製造、販売しています。

辻家は江戸時代の16軒赤絵屋のうちの1軒で、明治以降は絵具の製造販売に専念するようになりました



写真左・辻人之(昇楽)さん、写真右・辻公也さん

が、その製造方法は秘法とされ、家族でその技術を守ってきました。古伊万里や柿右衛門、鍋島など有田皿山を支えてきた有田の和絵具も、時代と共に使用する窯元も少なくなり、需要は減りつつあります。

しかし、伝統的な作陶を続けている有田焼の窯元を下支えする道具や原材料などは、年々その入手が困難となっています。そのような意味からも、今回の選定は有田町のみならず、佐賀県や国の大切な文化財として守っていく上で画期的なものといえます。

資料館ニュース

古文書教室・研修旅行を行いました

有田町歴史民俗資料館では生涯学習課、健康福祉課との共催で、毎年、古文書教室を開催しています。このほど、その受講生が佐賀藩の飛び地でもあった長崎県雲仙市国見町の神代小路にある鍋島屋敷への研修旅行を行いました。

恒例の陶器市も終わった5月12日、さわやかな五月晴れのもと、一行21名は一路雲仙岳の麓、国見町神代を目指しました。神代小路地区は有田町の内山地区と同じく、2006年に国の重要伝統的建造物群に選定されています。生垣や石垣の並びが美しい武家屋敷が立ち並ぶ一角に、鍋島屋敷があります。神代鍋島家は江戸時代、佐賀藩祖鍋島直茂の兄にあたる信房によって治められた所です。選定地区一帯は電



鍋島屋敷で説明を聞く受講生

柱や自動販売機、看板などは一切なく、静かな中に歴史を感じさせるたたずまいでした。

第13回 皿山ウォーキングを開催しました

毎年、有田町公民館と共催で春と秋に開催している皿山ウォーキングも13回目を迎えました。町内に点在する史跡や歴史的な資料を見ることで、町の良さを再認識し、さらには健康増進にも役立てることを目的に始めたものです。

今回は、5月21日（水）、41人の参加者と旧西有田町の窯業地・広瀬地区から佐賀藩の牧場が設置されていた牧地区までの約4キロを歩きました。山の斜面に広がる牧場跡には往時、多くの馬が駆け回っていたであろう様子を思い浮かべながら、ウォーキングを楽しみました。



佐賀藩時代の牧場跡を歩く参加者

資料のくん蒸

このほど有田町歴史民俗資料館西館（立部）館内で、資料のくん蒸を行いました。これは資料に付いているカビや害虫を駆除し、資料を保存するための作業です。

業者によって館内を密封し、薬剤を投与する作業を準備から4日間で行いました。この作業を行うことで、大切な資料をより完全な形で次世代へ伝えることができます。

今年度の事業予定

平成20年度事業として、有田町教育委員会ならびに有田町歴史民俗資料館では、この秋に二つの大きな行事を予定しています。一つは、全国重要無形文化財保持団体協議会の全国大会と秀作展を有田町と佐賀市を会場に開催します。これは全国にある和紙や漆器、織物など伝統産業に指定されている産地の製品を一堂に会し、年に一度、それを支えている職人や産地の人々が持つ技を、より多くの人々に見てもらうことを目的としており、有田町では焔博の折、平成8年にも開催され、今回が2回目となります。

また、有田町歴史民俗資料館は旧有田町、旧西有田町の館がそれぞれ昭和53年に開館し、今年で30年を迎えます。それを記念して、企画展「守りぬいた伝統～戦時中の有田焼」を開催します。内容は、昭和18年ごろにマルギという国策によって技術保存措置を講じられた窯元の作品110点余を紹介するものです。

これらは長い年月、名古屋市の日本陶業連盟に所蔵されてきました。有田焼の伝統を絶やさずに守り、次世代へ伝えていくために、先人がいかに尽力してきたかを知る絶好の機会でもあります。ぜひ、ご覧ください。

季刊『皿山』

通巻78号（平成20年6月1日）
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185